コロナ禍における県内登山の試み
（静岡県内南アルプス７座ワンデイ　間ノ岳～農鳥～塩見～荒川～悪沢～赤石～聖）

大　石　明　弘

YOUTUBE で317万回以上再生されているアルパインクライミングの人気動画がある。それはウエリ・シュティックが2015年に記録したアイガー北壁完登２時間22分の記録だ。アイガーのスピード記録を更新し続けたことで有名な彼だが、そのほかにも、テンカンポチェ北壁、ゴールデンゲート（９割以上をオンサイト）などテクニカルな課題もおとしていた。

さらに、アンナプルナ南壁単独28時間などヒマラヤ8000ｍの巨壁でも登攀を行い、他者の追従を許さない超人的な持久力をも保持していた。

2016年、彼がマウンテンハードウエアのイベントで東京に来た際、僕は、彼にインタビューをする機会を得た。インタビュー後はジムに向かい、ボルダーでセッションも行った。意外だったのは、クライミングジムでは驚異的に強いというわけではなかったことだ。彼はその時39歳だった。

「以前は、持久力が必要な登山と、テクニカルな登攀を同じ年に行えていたが、それが今では難しいと」いうことを語っていた。そして、「今は持久力にフォーカスしている」とのことだった。

「8000m峰の壁には目星をつけているラインがいくつかある」とも言った。

持久力トレーニングは、スペイン人のトレイルランナー、キリアン・ジョルネと行っているとのことだった。平らな場所ではキリアンに勝てないが、壁の登攀だと自分の方が強いということを朗らかに話していた。あまり知られていないが、2015年、二人はアイガーを10時間以内で登っている。ランナーのキリアンにとって、その登攀は大きな躍進だったに違いない。

一方でウエリもキリアンの走りに刺激を受けたのだろう。来日時は「マラソンで３時間を切りたい」と言う言葉もあった。

翌2017年４月、ウエリはエベレスト西稜～ローツェ山頂という壮大な計画を打ち立てる。しかし、その高度純化のためにヌプツェを登攀中、滑落して死んでしまう。ウエリが亡くなったとき、キリアンはエベレストの北側にいた。

そしてABCからエベレストを28時間30分で往復していた。フィックスロープと酸素ボンベは使わなかった。エベレスト登山中、キリアンは、ウエリのことを考えていたのだろう。ウエリとの出会がなければ、彼のエベレストもおそらくなかったからだ。

東京で一日会っただけの僕も、ウエリには魅了された。そして壮大な山を駆け抜けられる持久力を持ちたいと思った。

2019年からコロナが蔓延し始めた。日本だけでなく、世界のクライマーたちがローカルのエリアで過ごすことを余儀なくされることに。僕も地元の岩場に登っていたが、ある日キリアン・ジョルネの記録をたまたまインタネットで発見。それは自宅から走り出し、山から山へ次々と縦走し、56時間で168キロ、累積標高差22000ｍを登ったというものだった。

その記録に即発された僕は、自分の住む静岡市の

地図を広げてみた。南アルプスを擁する静岡市には７つの3000m峰がある。この「静岡市セブンサミッツ」を縦走するなら、世界中のクライマーがローカルの山に向かっている今だろう。そこで2021年夏に決行することにした。

ウエリの年齢を超え、僕は41歳になっていた。地図を眺め計画を練っていると、ウエリのこんな言葉を思い出された。

「僕は、自分が24時間から30時間くらいは動き続けられると知っています。逆に、30時間を超えてしまうと動けなくなる。そんな『限界』を知っていないと、山で動き続けることはできません。だから事前に『限界』を知っておくことは非常に重要です。」

７つの3000ｍを登るコースタイムをイメージしてみると、偶然にもそれは30時間程度になった。コロナ渦でほとんどの山小屋は閉まっており、休憩もできず、無補給で動き続けるしかない。ウエリの言う「限界」を計るには、絶好のタイミングになった。

７つの3000ｍとは、北から間ノ岳、西農取岳、塩見岳、荒川中岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳。これを北から南へ縦走する計画を立てた（間ノ岳の登り以外は、すべて市境以内の登山となる）。距離は約80キロ。累積標高差は7500m。

食料はジェル状のアミノバイタル８個、パワーバーのグミ、タケノコの里３箱、フルーツ系ソイジョイ４本、柿の種７個、一口塩大福10個、塩タブレット10個、塩ミックスナッツ約150ｇ。合計カロリーは4500カロリーほど。水筒はペットボトルを２リットル携行。

防寒着は、ロングティーシャツに雨具。防水性のあるシュラフカバーは一応持っていたが、眠らずに走り続ける計画だ。

８月４日朝７時に広河原を出発。３時間半ほどで間ノ岳山頂へ。富士山がくっきり見えるほど晴れ渡り、強烈な日差しに、初めからバテる。

先が思いやられたが、西農取岳の登りで曇天となり快調に走れるようになった。大井川源流のトラバース道で水を補給。その後、千塩尾根に乗る。

天気予報どおり15時頃、雨となる。森林限界を超えた塩見岳への登りで本降りとなったが、新調したゴアテックスの雨具のおかげで行動し続けることができた。塩見岳山頂に着くのと同時に、一気に雨雲が去り、青空が広がった。

周りは積乱雲が立ち並んでいる。見上げるのではなく、その雲の頂点と同じ高さに自分はいる。まるで自分も雲の上に立っているかのようだった。

その後、三伏峠の水場で水を補給。そこから荒川岳への登りで日没となった。藍色から黒色へと深まる山々を見ながら、黙々と登る。荒川岳山頂直下は崩壊が激しい。細くなった稜線をヘッドランプの光量を最大にして渡る。

さらに荒川東岳、前岳、悪沢岳の3000ｍの岩稜を夜中の強風の中進む。ちょうど前岳の山頂で、日付が変わる。防寒着はロングティーシャツと雨具だけで、冬山を縦走しているような寒さと緊張感があった。とはいえ、最小限の装備で8000ｍの壁を登るウエリから見れば、これは散歩でしかないだろう。

その後、荒川小屋まで下り、暗闇の中水場を探したが、どこも枯れている。例年水が豊富なこの場所でまさかの展開。ボウフラがわいている桶の水をペットボトルに入れたが、飲む気がしない。

小赤石岳付近で夜明けとなる。山々はオレンジ色に焼け、その上には深い藍色の空が広がっていた。晴れているということは、ここから灼熱の時間が始まるのだ。

赤石岳山頂にある避難小屋には雨水を貯めたものがあり、口に含んでみたが、やはり飲む気になれなかった。すでに出発から22時間が経過し、体力がど

こまで持つかもわからなかった。

ここから下山してしまおうかと逡巡したが、どうしてもあと一つ登頂して「静岡市セブンサミッツ」を完成させたい。すでに聖岳は、夏の強い日差しを受け緑色に輝いている。だがその道中には、豊富な水量の沢があるはずだ。思い切って、聖岳に向かって足を踏み出した。

盛夏の日差しが、ジリジリと肌を焼いていく。脱水症状になるまで時間の問題だった。さすがのウエリも暑さには強くなかっただろう。それにしても数時間前までは冬山のような寒さに震えていたのに、なんという急展開だろうか。砂漠の冒険の名作『サハラに死す』を思い出し、そこに出ていた「冒険とは可能性への信仰である」というフレーズを口に出す。

果たして、聖岳手前の沢に、水は、大量に流れていた。脱水症状気味だった体が、一気に甦り、ペースも回復した。すでに獲得標高差は7000ｍを超えていたが、足が動かなくなることはなかった。ただ、暑さは相変わらず辛い。

10時30分に聖岳に登頂。出発から27時間経過していた。聖岳山頂からは、超えてきた山々が望まれた。地平線の彼方に、かろうじて間ノ岳と思われる山があった。すべての山が夏の強い日差しを受け、鮮やかな緑色に輝いている。だが暑すぎて、その大パノラマを美しいと思えなかった。

赤石ダムまでの登山道は、樹林帯で涼しくなったものの「これは廃道か？」と何度もつぶやいてしまうほど道が荒れていた。後で知ったことだが台風で道が荒れ、その後コロナで山小屋が閉まり、補修されないままになっているようだ。

最後はルートがよくわからなくなり、岩でざらざらの斜面をクライムダウンして赤石ダムの湖畔に下りた。そしてそこから無情の15キロ林道ランニング。ランナーではない僕には、登りよりも辛い。

友人の待つ畑薙湖駐車場には、午後４時すぎに到着。入山から約33時間。累積標高差は約7500ｍ。距離は80キロを超えていた。終始抑え気味できたおかげで、ゆっくりだが最後まで走ることができた。夜の７時すぎには家に戻り、家族で夕飯を食べた。

「昨日から父ちゃんちゃんどこに行ってたの？また長野県の山？」という聞く息子に「静岡市の山を登っていただけだよ」と答えた。「じゃあ僕も遠足とかで行けるかな？」という息子に「ちょっと難しいかな」と答えた。「市内」にも雄大な世界があることを説明したかったが、クーラーの効いた狭いリビングでそれを説明するのは難しかった。

コロナによる「自粛ムード」は残っていたが、ワクチンが出回ったおかげなのか、感染者数はどんどん減っていった。

そこで僕は「市内」ではなく「県内」に目を向けた。静岡県には「静岡市セブンサミッツ」に含まれない、もう一つの3000ｍ峰がある。言わずと知れた富士山である。

そこで富士山を海抜０メートルから登ることで「体力測定」を行ってみたいと思った。どうせ、やるなら「冬季」である。

そんなわけ、2021年12月５日、４時30分、田子の浦港から富士山山頂を目指し出発した。

葛飾北斎や歌川広重の日本画など数々の芸術作品にされている有名な「青い海と、白い富士」。しかし、その二つの世界を一日で楽しん人は、歴史的に見てもいないはず！と、気合は入っていが、ピッケル、アイゼンなどの冬山登山の金物を背に、ガチャガチャ音を立て、海岸から走りはじめる姿は、かなりシュールだったと思う……。

富士市街を横断し、グリンパスキー場へと続く車

道へ。途中の十里木高原には源頼朝が発見したという伝説の泉があり、そこで水を補給。川や沢のない富士山南麓の斜面で、ここだけ水が湧き出しているのは神秘的だ。

グリンパの先で、ようやく登山道に入る。森林限界を超えた時に見えた富士山全景は、比較的雪が少ないように見えなした。しかし予想に反し、６合目からはガチガチの氷雪に。

ここで数人の登山者とすれ違う。時刻は12時過ぎ。「どこまで行くの？」と、訝しげに聞かれたので、「山頂まで」と答えると「日没になるよ。大丈夫？？」と注意される。しかし海から登っているので、すでに８割がた登っている。ここまでくれば山頂は目と鼻の先。しかし、その考えが甘かった。８合目を超えると一気にスピードが落ちた。高山の影響だ。

その８合目から上は、富士山頂上浅間大社の「奥宮境内地」。昔の修験者たちも空気の薄さに、神の存在を感じていたのだろう。そして冬の今、その境内は氷と岩で覆われている。そんな「異界」に、街から数時間できてしまった――。

山頂の鳥居は、ガチガチの氷で覆われていた。剣ヶ峰には15時20分に登頂。海から10時間50分だった。眼下には水平線まで続く雲海。その雲間から海が微かに望まれた。あの遥か下から登ってきた。そのスケールを自分の心身に取り込めた気がした。

剣ヶ峰には、寒さに耐えきれずにすぐ下山を開始。５合目付近で日没を迎えたが、ヘッドランプで駆け下り、午後６時30分に友人の待つ水ヶ塚駐車場に到着。

その後夕飯を、富士市のレストランで格安バイキングを食べた。看板でごちゃごちゃとした街の通りからは、月明かりに白い富士山が浮かびあがっていた。

昔も、今も、静岡の人々の暮らしのすぐ近くに、壮大で厳しい富士山は聳えていた。この「日常」と「異界」の近さが、富士山の特徴なのだと思う。だからこそ、北斎も広重も、富士山と人々の暮らしを絶妙な構図で描いていたのだろう。

彼らが一枚の絵で表した異界と日常の融合を、今回僕は一日の登山で体感できたと思った。

このように夏に南アルプス縦走を行い、冬に富士山を登ったことで、地元である静岡県の3000m峰をすべて登った。累積標高差は10000mを超えた。

この登山を行っている間、何度か考えていたことは、やはりウエリのことだった。

ウエリはどのような意識で8000m峰に山に向かっていたのだろうか。たぶんそれは、いかに「省エネ」で登るかということだろう。アイガーのスピード記録の時は、２時間半で「力を出し尽せるか」がカギだったのだと思う。しかし8000mでは、「力を残して動き続けられるか」を意識し続けていたに違いない。

ウエリに影響を受けたキリアンは、エベレストに28時間30分で登頂しているが、実はその５日ほど前にもロンボク寺院を出発し、エベレストに登頂して、ABC戻るということを38時間で行っている。つまり１週間の中で２回エベレストに登頂しているのだ。このような記録は「省エネ」で登らなくてはできない。

一般的に人は、20歳を過ぎた時点から体力が落ちてくると言われている。しかし、それはスポーツのように比較的短い距離の中で体力をいかに「出し尽くせるか」と言った部分での話だろう。

いかに「省エネ」で、長時間「体力を残していけるか」といった登山活動においては、加齢による能力低下は少ないのはないだろうか。いやむしろ経験の積み重ねで力の抜き方がわかり、パフォーマンスはあがるのだと思う。ウエリは来日時に、こんな言葉も残していた。

「体力が落ちているという実感はありません。むしろ上がっている。45歳くらいまでは上がり続けるのではと思っています。」

ウエリのレベルには到底及ばない。だが、彼を思いながら静岡県の3000m峰を登り終えた今は、やはり彼のように、より壮大な山を駆け抜けられる人になりたいと強く感じている。

富士山に登った後、年末あたりから新種のオミクロンが流行し始めた。また「自粛」が求められるのかもしれない。厳冬期の「市内」を意識した時、赤石岳のワンディの計画が思い浮かんできた。

そんなローカルの山の登山計画を立てながらも、僕はいつか向かうべき海外のラインから目離せないでいる。

「Think globally，Act locally」

環境保護で使われてきたこの「世界を意識して、地域で行動する」という意識は、コロナ禍の登山にも当てはまるのと思う。